

「人文知の未来」



近年、大学のあり方や学問の枠組みが大きく変わってきている。大学では教養部が解体され、文学部という名称がつつぎと消えていくなかで、かつてはその価値が当然のものとして認められていた人文的な知や教養というものについても、その崩壊が語られさえしている。

価値観が多様化し、民族や世代によってさまざまに異なった文化が共存しなければならぬこれからの時代に、人間と社会について様々な個人がどのような共通の理解を土台として共に生きていくべきなのか、どのような人文的教養が求められているのかを、学外者を交えて討議し、文学、歴史、哲学などの人文的教養の意義を再確認するとともに、文学部の将来像を探るひとつの試みとして、県立大学文学部では二〇〇四年（平成一六年）一月二六日、「人文知の未来」をテーマとする文学部フォーラムを開催した。

以下は、その概要の報告と、学習院大学文学部教授吉田敦彦氏による基調講演の要旨である。



文学部フォーラム「人文知の未来」（県立大学文学部主催、県立大学地域交流センター共催）は、二〇〇四年（平成十六年）一月二六日、県立大学新講義棟大講義室において開催され、学習院大学文学部教授吉田敦彦氏による「人文知の未来」を標題とする基調講演のあと、「人文知と私たち」と題したパネルディスカッションが行われた。

基調講演では、西欧人によって「未開人」と呼ばれた人々の「蒙昧な」文化の研究として始まった神話学という学問が、コペルニクスのとも言うべき根本的な認識の枠組みの変化を経て、人間の世界認識と価値の体系を解き明かそうとするものとなってきたことが紹介され、神話研究が人文知の未来にとって重要な位置を占めものであるという認識が示されたが、同時に、そ

うした研究を進めるためには、確立された学的伝統を持つ学問分野での研究が必要であるという主張がなされた。

パネルディスカッション「人文知とわたしたち」では、文学部日本語日本文学科の半藤英明教授、英語英米文学科の樋口康夫教授、熊本日日新聞社文化生活部次長松尾正一氏、くまもと県民交流館館長の緒方洋子氏の四人のパネラーによって、それぞれの専門分野、職業経験から、人文知との関わりやその意義が論じられた。

半藤教授は、現代日本語における「係結び」の消滅を一例として、現代日本人が言葉の余韻、余情を楽しむゆとりを失い合理性に傾斜していることを指摘し、人文知の基礎としての言葉の知識の重要性を論じた。

樋口教授は、英国エリザベス朝の演劇や詩の研究を専門分野としながら、その研究を深めるために、深層心理学、植物誌と関心を広げていくなかで、学際的な研究の必要性を感じるようになったことを紹介した。

松尾正一氏は、最近熊本市近代美術館で開かれた「生き人形



展」を可能にしたのが、熊本日日新聞社の前身である九州日日新聞の記者の残した書物であったことを紹介し、時流に流されず、近代化にひた走る中央が「遅れたもの」として捨て去ったものの価値を認めることのできた地方文化の力を、目指されるべき人文知のひとつの方向性を示唆するものとして示した。

緒方洋子氏は、「くまもと県民交流館パレア」の「生涯学習推進センター」のさまざまな活動を紹介しつつ、現代の社会では実学が重視され人文的な教養が軽視される傾向があるが、実は、本を多く読み人文的教養を身につけた人たちこそが、しっかりした現実対応能力を備え、新しい生き方や町づくり等に貢献できると論じた。

其調講演の時間が大幅に延びたために、パネルディスカッションでは各パネラーの発言のあと議論の時間がほとんどなくなり、実質的な討議を発展させることができなかつたことが残念だったが、会場には本学学生のほか公開講座受講者や一般来聴者を含め約二〇〇名が参加し、最後まで集中して議論に耳を傾けていた。

(文責 砂野)